

水道ジャーナリスト・有村源介の

源流 本流 汽水域

NO.31 コロナ禍の半年



レストランで注文の品が出るまでは  
この状態（2020年6月下旬、京都で）



京都駅新幹線ホームにて（同）

武漢で新型感染症が発生し拡大しているらしい、という話が広まり始めたのは新年が明けてまもなくの頃で、私は日本水道新聞で掲載する「沖縄水道特集」の取材のため、2泊3日で那覇市～宜野湾市～南城市を訪問していた。帰宅して沖縄特集の記事の入力作業が中心の半月を過ごしていたが、立命館大学教授にしてJAZZピアニストの神子直之LIVEに出かけたり、途上国の水道に携わっている人たちの勉強会、東大で開催された水フォーラム、給水管耐震化委員会等々、賑やかなスケジュールの日々を過ごしていた。新型コロナウイルス感染症により、世の中の様相が一変したのは、沖縄水道特集が発行された2月21日前後からである。感染症であるということ以外、何も明らかでない状況に日本中に不安が一挙に拡大した。

沖縄特集が発行されたら、取材や広告協賛に協力して頂いた沖縄の皆さんに、すぐに新聞を配布するつもりだったので、事前に廉価なチケットを手配していた。新聞特集号を発行するのだから、協力頂いた方々へ届けるのは当然のことであるが、沖縄となるとそこまでの必要はない、というのがこれまでの常識だった。

まず、「遠い」ということがその理由である。しかし、フライトに要する時間は東京から往路3時間、復路2時間半である。本州の中で同程度の移動は珍しくもないが、沖縄という大きく印象が変わる。よく言われるのは「羨ましい」、次に「大変ですね」。東京・大阪間はのぞみで2時間30分なので、それほど差がある訳ではないが、沖縄は「ヤマト」の間人にとって永遠に別天地で、しかも「美ら海・リゾート」のイメージしかなく、それが「羨ましい」という台詞に繋がる。その前にまず、「琉球処分・地上戦・米軍統治・基地問題」を

認識すべきであり、水道分野で言えば、「湯水・県企業局・原水水質・離島水道・貯水槽水道」を認識しなければならない。

私自身は頻繁に沖縄を訪問していることもあって、那覇と東京の「距離感」は大幅に変わってしまった。つまり、長距離とも長時間とも感じなくなっているが、その理由の1つは価格破壊と電子道具の普及だろう。航空券の価格は既に何十年も前からホテルとセットになった「パック商品」が登場し、正規航空チケットの価格がいくらだったか分からなくなるほど、廉価になっている。もう1つは通信機器と電子入力機器の登場である。1980年代半ば、携帯電話が登場し、私が知る限り水道事業体で最初に導入したのは横須賀市水道局で、凄い通信機器が登場したものだ、と感心したが、その携帯電話はガラケーと呼ばれるようになって久しい。ノートPCは普通に使われている。私自身は通信機器としてガラケーとiPhoneを使い、文章の入力には旧式のポメラを使っている。ポメラは機能的にはPCとは比べようがないほど落ちるが、移動中の機内・車内で文章を入力するだけの作業には十分である。

決定的だったのは、iPhoneを購入し自宅に届く電子メールを転送できるように、子供に設定して貰ったことである。これにより、数日間の不在なら何の支障も無くなった。

2月下旬の沖縄訪問に対して家族は止めて欲しいというし、出かけてみると羽田空港、那覇空港とも閑散として、機中は2人席も中央通路の4人席も、1列おきに1人が座っているという状況だった。つまり、この時点で世の中は既に「緊急事態」と認識しており、「三密回避」に走っていた。日本政府の対応が極めて遅かったことに対して、この半年以上の間、批判され続けてきたが、それは当然であろう。1月下旬には、「オリンピックなんてできるはずがない」というのは私の周辺のみならず一般の常識的な見方だったが、実施すると言ってまだ“頑張っ”ていたし、「もしかして検討の必要が」と発言した女性国会議員が批判される始末だった。オリンピック延期の決定は3月24日だった。この頃、世の中は恐怖感で萎縮し冷え切っていた。

さて、沖縄での仕事は一段落させたものの、月刊「コア」で連載を抱えている。これから何か月間か続くであろう自粛・萎縮に備えて、インタビューに応じてくれる人物を確保しなければならない。

4月号 テキサス大学・池端慶祐助教授＝幸にも交流があり、メールのやり取りで記事を完成させることが出来た。

5月号 北海学園大学・安藤直哉准教授＝年末に准教授就任インタビューを実施しており、急遽「次世代担うインタビュー」に切り替えて凌ぐ。

問題は6月号からである。3月31日、東京都立大学・荒井康裕准教授がコロナ禍にもかかわらず、インタビューに応じてくれた。地方都市へは訪問できる雰囲気ではなくなり、この頃になると、首都圏からの訪問は犯罪行為に等しい扱いである。ところが、金沢大学・本

多了准教授が取材に対応してくれるという。

4月2日、金沢へ向かった。2時半に駅前で拾ったタクシーの運転手は、朝からタクシープールで待機して、初めての客だという。街に人気はなく、観光客は若い女性のグループを2組程見かけたかどうか。帰りの新幹線では1車両に乗客は2～3人という状態だった。つまみと酒を買い込んで、2席分のテーブルを倒して盛大に広げ、インタビューの「1人打ち上げ」を楽しんだ。洗面所に立つと若い女性の乗務員がせっせと手すりやドアのハンドルのふき取り作業をしており、目が合うと会釈をしてくれる。たった2～3人の乗客のために。

4月7日、緊急事態宣言が発せられ、1か月半の引きこもりに入った。しかし、6月下旬には再始動し、冒頭の写真の通り、京都で仕事を楽しんだ次第である。